

島崎藤村『夜明け前』を巡って

——シンポジウム報告——

金戸清高

二〇〇六年二月二日午後、山口大学人文学部にて近代文学談話会の第九回シンポジウムが開催された。今回は島崎藤村の『夜明け前』をテキストに、パネラーとして中原豊氏(司会を兼務)、野坂昭雄氏、そして田口律男氏が発題の任にあたった。

始めに中原氏から談話会のこれまでの経緯について次の説明があった。

近代文学談話会は永らく山口大学で教鞭をとられた水本精一郎氏の「近文ゼミ」を、シンポジウムという形で開催したいという卒業生の呼びかけによって始まった。次第にテーマを絞り込んで、昭和初年代から十年代の文学を中心とした文学作品を扱うようになり、その集大成として水本氏のライフワーク『夜明け前』をとりあげるという計画であった。ところが二〇〇三年、水本氏が脳挫傷という大変なお怪我をなさり、リハビリにとめておられたが、二〇〇四年の一二月に他界された。『夜明け前』をとりあげるにあり、水本氏のご意見を窺えないということで開催を延期してきたが、残念な結果になってしまった。

水本氏の『夜明け前』についてのお考えを窺う機会を永遠に喪つ

てしまったと思つたのだが、氏が遺された文書を探すなかで、一つは『夜明け前』論への序章(以下「序章」、引用者注)というファイルがみつかった。これは二〇〇〇年の一月三十一日三時一六分が最終校正だった。それからもう一つ、「藤村の文明論資料」(以下「文明論資料」引用者注)というタイトルで、この二つのファイルの関連性が強いということが判ってきて、これで水本氏の『夜明け前』に対する見方がなんとか窺えるのではないかと考えた。この「文明論資料」の最終校正が二〇〇三年の九月一九日二時四〇分になっていたのだが、氏が事故に遭われたのが九月二二日で、その三日前にあたる。おそらくこれが九月二六日の藤村学会で発表される予定だったファイルであろう。生前『夜明け前』を論ずるには藤村の「文明論」をやらなきゃいけない」と窺っていたのだが、この二つを接続させることによって、かなり水本氏の考えが見えてくるのではないか、そういう形で水本氏にもこのシンポジウムに参加していただき、永く続けてきた談話会のひとつのシリーズの締めくくりとした。

中原氏の発題は、自身が最後まで水本氏の手伝いをしてこられた

経緯から、サブテクストとして氏の遺された資料を、徹底的に読みこみ、そこにある色々な空白を埋めていく作業をしながら、水本氏が書こうとしておられたことを探る中で自身の読みを展開しようという試みであった。以下はその要約である。

一つめは「序章」にある「民族問題」、「文明論資料」にある「ナシヨナリズム」の問題である。これは「文明論資料」に挙げられた多くの引用から推測することができる。浮かび上がってくるのはやはり「ナシヨナリズム」のもつ「排他性」「閉鎖性」の問題である。ここには「ナシヨナリズムの向こう側」というサブタイトルがつけられているが、この「向こう側」として水本氏が考えられたものは、まず冒頭に引用された川端康成の、『夜明け前』は「今日の彼方を指す」という指摘に示唆されているであろうし、また、ベルグソンの引用にある「人類愛」あるいは「全人類を包含するような社会」、これはきわめて観念的なレベルでの指摘ではあるが、こうしたものが「向こう側」として考えられているのではないか。それから丸山真男の「執拗低音」であるが、変化する時代の底にあるもの、丸山が旋律として表象しようとしたもの、これを捉えること、つまりナシヨナリズムを簡単に超えることよりも、むしろその底流にあるものを見つめるということ、そちらに水本氏の関心が見えているのではないか。

二番目に「執拗低音」といった連続性の問題であるが、「時代としての継続性」、それが「自己の再検討」でありまた「父の発見」であり、それが一連の「回想」に「思索経路」として書かれている。また、「長編執筆の時間が次の長編を生み出す」という「モチーフの連鎖」、そして『家』執筆後の断絶は、実人生の転機とともに、

明治から大正へという時代の変化と呼応」していた。ここに時代の流れと自分自身の人生ということ、そして時間の継続ということ、そういった要素がこの中に含まれている、ということが出来る。更に「融和問題と文芸」では、水本氏が傍線を引かれていた『破戒』の、この時点での自己評価、人間の解放を書こうとした、父と子の関係を書こうとしたというところに「夜明け前」の重要なモチーフがあると考えられる。また、「都会」におけるロダンの言葉は「自然」とつながる問題であるし、「融和問題と文芸」にある「自然」ともつながる。また「断片」にある河上肇との論争にあったように、「黒船が幽霊であった父の時代と、汽船に乗って渡航しようとしている私の時代の隔たり」にも関わる。他にも『夜明け前』には、十九世紀の日本の変化というものを連続的に捉えなければならぬという問題意識が何度も繰り返されているのだが、それにつながるものを、水本氏の、もう少し個人のレベルで指摘しようとしていたと推測される。

「宇宙の闇」という表現が最も解りにくいのだが、たとえば「文明論資料」に「幽霊」という記述がある。「生き、愛し、死ぬる私たちの血もあり肉もある正体は真に親しきをもつては知られてゐない」、つまりフランス人に日本人は知られていないというこの認識は、翻って自分自身、つまり日本人も日本を、日本の近代化というものを知らないのではないかというように、逆に自らの視点にも向けられるものではないか。それが『破戒』の自己評価にある、「暗い土の中に隠れて居る石でも掘起す気持」、このあたりが「闇」と言われているものではないか。あるいは「芭蕉のこと」に書かれている「寂しい境涯から暗い宇宙を探ることも出来たのは芭蕉」であ

るといふ認識、更に「人形の家」を讀みて」にある、イブセンの「宇宙の暗い所を探らうとするやうな目」、こうした部分を繋げて考えてみると、「宇宙の闇」といふ言葉で水本氏が指摘しようとしていたのは、丸山真男のいう「執拗低音」、変化していく時代の表層の更に底にあつて、続いていくもの、それが全体としてひとつの音楽として出来ている、そういう歴史観であり、その「執拗低音」にあたるものを見つめようとされていたのではないかとということが、水本氏の「夜明け前」への視点であると推測される。

(中原氏の) 私見としては、まず「夜明け前」の時間構造という所に関心を持ち、その中で特に水本氏の資料に触発されて、『嵐』における「柱時計」の、古い時計を持つた自分の家に新しい柱時計を持つてきてそれを長男が建てた新しい家を持つて行く、その表象に時間の問題、そして「都会」と「地方」との問題を包含しており、『嵐』で明らかにされてた問題が「夜明け前」の先駆けとなつた。

更に「夜明け前」の冒頭に窺える「鼓動と振動」が、結末における、鉄道の開通によって木曾街道が旧道化していくという変化にも表れているし、また、「時間を正確に守る」ということは、当時の人の習慣にない(第一部第六章七)が維新後、「郵便事務を取り扱うところに」「柱時計がかかり、かちかちという音がし出した」(第二部第七章四)という部分と対照をなし、このようなひとつの近代化の流れが、時間の表象として表れている。

次は中原氏が捕捉として説明されたものの要約である。

『夜明け前』の内容がストリートかアイロニーかという野坂氏の疑問でいえば、これはアイロニーに満ちた小説だといふ認識を持つ

ている。つまり半蔵の行動がごとく潰されていく、特に第二部ではそれが顕著なのだが、明らかにこれは逆説的な描かれ方であると思われ。

また「夜明け前」理解のためには、「執拗低音」がキーワードになるのではないか。「夜明け前」というタイトル自体が、実はこれは八永遠の現在√、つまり歴史といふのはある意味で常に夜明け前であるということではないだろうか。半蔵の死によって逆説的に浮かび上がってくるものが「執拗低音」である。最後の場面、『夜明け前』には二回埋葬の場面が出てくるのだが、父吉左衛門が亡くなったとき(第一部第六章七)と、最後の半蔵の埋葬の場面(第二部終の章十)が、父と子の対照になっている。通常は藤村と父正樹との関係に絞られがちだが、『夜明け前』には二重の父と子との関係が書かれている。半蔵の埋葬の場面で、先述した交通の問題とかが出てくるのだが、一番最後の場面は「墓掘りの男たち」の「鍬」の音で締めくくられている。土の「におい」と「鍬の響き」が続く、これによって表象されるものがまさに「執拗低音」ではないか。そういった意味で半蔵の理想主義と敗北というのがまさに逆説的な描かれ方が出てきている。

次に野坂昭雄氏は、鳥崎藤村の関係で水本氏と共通の知人がいることを紹介され、氏の論を紹介するという形で今回の発題とし、できれば最終的に水本氏のお考えと結びつけていきたい、その際のポイントとして「夜明け前」を左翼小説、あるいはプロレタリア文学という風に捉えることができるかという点に着目してみたいとの説明があった。以下野坂氏の発題を要約的に引用する。

青山半蔵が、階級闘争と積極的に関わらないという青野季吉の指摘は、当時の人からすれば『夜明け前』を読んで、階級闘争とか階級関係に焦点化することが、極めて自然なことだったことを意味している。なぜなら、まず第一に「下から」盛り上がった（維新）を描いていることと、農民の一揆や「山林事件」など、労働者の反抗を描いていること、また、半蔵が目指しているのが、謂わば、古代日本の再生であるという点がある。社会主義とか共産主義には、原始協同体への憧れというものが根底にあったのだが、左翼マルクス主義とナショナリズムという、一見相反するものがお互いに重なり合うように思われる。左翼主義者が転向を經由してナショナリズムに向かうという経路は、マイケル・ボーダツシユ氏によれば「（実）の『夜明け前』論はマルクス主義者が突然ナショナリストに展開できる理由を暗示している。その理由とは、双方の思想が一つの歴史的な枠組み、日本国史を語る空間的・時間的な構造を共通していたことである」。

少なくとも『夜明け前』が転向小説として評価されたのは、転向者の抱える両義性がそのまま小説のスタンスでもあったからだろう。『夜明け前』の両義性というものは、西洋と日本の共通性、あるいはその違いといったものを巡る両義性でもある。これを一九三〇年代の文脈で読むならば、たとえば萩原朔太郎の「日本への回帰」、あるいは小林秀雄の「故郷を失った文学」というように、「回帰」や「帰郷」といったモチーフが提起した問題と通底している。その場合、明治近代以降の西洋化が、ある程度完了したという認識があり、それに伴って、西洋との違いや日本固有の文化、伝統の発見が導かれたことを考え併せれば、『夜明け前』は、「近代化をターゲット

トにした異種の近代批判」と読める。マイケル・ボーダツシユが引用した原実の、「夜明け前」を日本の民族的なアイデンティティとの連続性を強化するものと理解するのは十分可能であるが、早急な結論を出すよりも、寧ろ『夜明け前』というものを、幾重もの連続的な装に覆われた、もつと奥の深い小説と考えたい。おそらく水本氏もそのようにこの小説を捉えていたのではないか。

ところでマルクス・エンゲルスは『共産党宣言』の冒頭を次のように始めている。「ヨーロッパに幽霊が出る——共産主義という幽霊である」。ここでいう「幽霊」とは、いまだはつきりとした形をもたないために理解されないもの、というぐらゐの意味であるが、水本氏が資料で引用しておられる「黒船」に関するものも、おそらくこれと同様の意味であると考える。水本氏の資料にある、「黒船」を「幽霊」と見立てる記述であるが、これももちろん、半蔵が見た「幽霊」とも重なってくるだろう。「暗い中世の墓場から飛び出して大衆のなかに隠れている幽霊こそ彼の敵だ。明治維新の大きな破壊のなからあらわれて来た仮装者の多くは、彼に取っては百鬼夜行の行列を見るときのものであった。皆、化物だ、と彼は考えた」〔『夜明け前』第二部第十四章三〕とある。これは維新によって滅びたと思われていた「中世」、すなわち封建制への回帰と考えてもいい。東京で教部省御雇として半年服務した職場を後にした半蔵が、父母の夢を見るという場面があるが、その部分が伏線という形で出てきているが、マルクスの「ブルジョア革命」が封建社会の伝統を破壊してしまうのに対して、『夜明け前』で半蔵が戦わなければならなかったのは、寧ろ残存している封建制であると言える。その点で、「大衆のなかに隠れている幽霊」と対決しなければならない半

蔵は、封建制と対決しなければならなかったマルクス主義者と重ね合わせる事ができる。

吉本隆明氏は「転向論」で、佐野、鍋山の転向を、単なる天皇制や封建制への屈服ではなく「大衆的な同行への全面的な追従」、大衆からの孤立に耐えられなかったからだと指摘している。一九三〇年代における日本近代史の再構成という文脈のなかに『夜明け前』を置くと、どうしてもマルクス主義運動との連関という面からこの小説を捉えたくなる。半蔵は吉本が言っているような転向者像と非常に良く似ているのではないだろうか。

ところで成田龍一（『歴史』はいかに語られるか）が言っているように、この時期には、明治維新研究においては「実証主義」「マルクス主義」「国粹主義」という三派が「鼎立」している状態であった。このイデオロギー的対立や、そして維新の経済史的解釈の違い、維新を経済史的に解釈する観点との解釈の違いは、この時代の日本のアイデンティティ形成と深く関わっている。

また小山弘健（編）『日本資本主義論争史』（上・下）に明治維新の解釈を巡った論争が採りあげられている。即ち幕末維新史を巡る論争は、「マニファクチュア論争」と呼ばれており、江戸時代後期に厳密な意味におけるマニファクチュア時代が存在したか否かということが問題となっていた。むしろ一九三〇年代にそうした論争が起こったというのは日本の歴史的なイメージを形成する上で、そのような論争が不可欠であったからではないだろうか。

そうした意味で『夜明け前』を転向小説として読むことになら矛盾はない。荒俣宏氏は、藤村が「プロレタリア文学よりも一層偉大であった」と指摘する。なぜならプロレタリア文学が必死で運動

しながら結局は挫折していくといった当時の模様を、当初から予測していたためだと指摘している。そういう意味では『夜明け前』は、転向そのものを予兆していたという風に考えることができる。これは非常なアイロニーというべきだろう。これを藤村の個人的な問題に結びつけることも可能であるが、できればそうした知見に回収させないようになりたい。もし荒俣のように解釈してしまえば、プロレタリア運動崩壊後にあらわれる日本主義ということと藤村とを安易に重ね合わせてしまいかねないからだ。

高山茂の『夜明け前』論のなかで、日本の維新を説明する際に、「比較史学」という方法を用いている。辛亥革命は我が国の戦国時代、ドイツの農民戦争（一面宗教戦争）といわれるものに照応するという風に言っているが、こうしてしまえば、西洋を中心とする歴史のなかにあらゆる国の歴史は回収され、西洋以外の国は西洋を規範とした枠組みのなかに囚われてしまう。問題はこうした一種の歴史主義の枠を超える可能性がこの小説にあるかどうかという点にある。

次にマイケル・ボーグツシュ氏は『夜明け前』を転向文学の作品として扱うだけでなく、それがある意味で転向文学の無比の傑作として考えたい、という風に指摘している。そして氏は続いて伊藤信吉の藤村論に触れ、「伊藤信吉が藤村に見いだしたのは、マルクス主義によらない社会性がある」という風に指摘しているが、そこからマイケル・ボーグツシュ氏の論は小林秀雄の文章に移行していく。「私小説論」（昭和一〇年）で小林は、『夜明け前』の作者を「歴史物に心魂を打ちこむことによつて」私小説の「危機を征服してある」と賛美するが、この論文、そして同時代の他の評論にも、小林は文

学史上のある連続性を指摘する。それは、日本の自然主義文学とプロレタリア文学とのつながり、類似性であるが、小林はその両方を文学運動として否定する。

更に「音楽会の夜、その他」の挿話は、「私達が故郷を失った文学を抱いた、青春を失った青年達である事に間違ひはないが、又私達はかういふ代償を払つて、今日やつと西洋文学の伝統的性格を歪曲する事なく理解しはじめたのだ。西洋文学は私達の手によつて始めて正当に忠実に輸入されはじめたのだ、と言へると思ふ」という小林秀雄の「故郷を失った文学」の一節、この小林もこの時点で藤村と同じように、「もつと欧羅巴から学ぼうではありませんか」と言っているように見える。だが、この後の小林秀雄の歩みは、日本の民族精神という方向へ進んで行く。実際に「故郷を失った文学」のなかで小林は、「具体性」、「しつかりと足を地につけた人間」「社会人」などの表現をよく書くが、昭和一四年頃のエッセイから、同時代よりも歴史的な出来事の方にむしる現実性や具体性を付与しているように思える。こうした点から見ると『夜明け前』は、歴史小説とはいえ、木曾路の自然を強い基盤としていることが解る。亀井勝一郎は、彼の『夜明け前』論のなかで、木曾路の自然の普遍性というものを指摘している。これは『日本浪漫派』に発表された『夜明け前』論であるが、故郷に帰った藤村も同じようにそこに変わらぬ風景を見いだしている。これは藤村個人の問題というよりも、一九三〇年代の文脈における表象の問題として理解するべき問題ではないか。

以下は野坂氏が捕捉として説明された部分の要約である。

水本氏の資料を拝見したとき気に掛かっていたのはベルグソンの問題で、平山高次の『道徳と宗教の二源泉』が藤村の蔵書にあったということがある。そこに揚げられている、「家族愛」とか「国家愛」から「人類愛」には連続しないという指摘がある。この一種の飛躍というものをどういう風に考えて行くのか、あるいは水本氏がどう考えていたのかということが、これは「向こう側」というものと関わるが、気になったということを書いておきたい。

それから『夜明け前』がストレートに書かれているものなのか、アイロニーに満ちたものなのかということが、見分けにくいという印象を持っている。その点評価が分かれるのではないかと思うので、付け加えさせていたきたい。

最後の発題者として田口律男氏は以下のような発題をされた。

水本氏は、『夜明け前』に内蔵された「民族問題」、「ナシヨナリズム」に鋭く感応していたふしがある。そこで、遺されたメモ類を補助線とし、①水本氏がどんなことを考えておられたのかという認識の枠組みを検証する。次にそれを受けて②ナシヨナリズムという大きな枠のなかで『夜明け前』というテクストの持っている座標位置を測定してみる。そして生前水本氏に反抗ばかりしていたので、ここは潔く、やはり③水本氏が『夜明け前』に読み込みもうとしていた可能性に対するオルタナティブ（代案）を探りたい。

結論的にいえば、水本氏は、『夜明け前』のなかに内発的なナシヨナリズムの可能性をさぐっていたのではないだろうか。「内発的な」ナシヨナリズムとは、水本氏だけが使っているのではなくて、氏がライバルと目していた三好行雄が、「現代日本の開化」における、

日本の近代が「外発的」であった、「内発的」ではなかったという夏目漱石の指摘、その講演から約二〇年後に発表されたこの『夜明け前』は、漱石に対する藤村の「答案」であって、ここに藤村は「内発的」なナシヨナリズムを書こうとしたのではないか。水本氏の理解も、勿論微差はあるのだが、多分、方向性としては、こちらを睨んでいただろう。「内発的」というのはやはりそれを「父」の問題や、「自然」とか、「伝統」とか、あるいは中原氏も指摘しておられた丸山真男の「執拗低音」という問題とつながるもので、いわば、観念とかイデオロギーに回収されない、日々の暮らしのなかから培養された主体的なナシヨナリズム、といったものをこの『夜明け前』のなかに読み込もうとしていたのではないか。その意味で、『夜明け前』に内蔵されるナシヨナリズムは、時局に迎合的なものとは多分無縁だろうし、昭和一〇年代の「日本回帰」ブームとも異質な面があるだろう。水本氏はこうしたベクトルの向こうに、近代のナシヨナリズムをこえる可能性を讀みとろうとしていたのではないか。水本氏の「文明論資料」では、「『夜明け前』と現代的課題」の副題として中原氏も指摘しておられたように「ナシヨナリズムとその向こう側」と記しておられる。この「向こう側」ということだが、やはり狭隘な排他性を伴うナシヨナリズムとは違うナシヨナリズムの可能性を讀み取ろうとしていたのではないか。

しかし冷静に考えれば、青山半蔵の生涯は平田派の国学につき動かされていく。それは本居宣長とは異質なものであるはずなのだが、青山半蔵のなかでは平田篤胤と本居宣長とがセットになっていて、このロマンの熱狂に駆られた半蔵の生涯は、篠田一士によれば、「歴史的事件あるいは事実に対してはいちどとして主動者でありえ

たことはなかった」。つまり歴史の大きな動きのなかで半蔵がコミットできた部分は本当に限られていて、大きな歴史の流れからすれば殆ど何の影響も持たなかったということである。なぜならそれは明治の新政府が選択した方向が平田派の国学とはまったく逆向きで、「ヨーロッパの近代的原理に立脚する世界秩序」（高山岩男）へのコミット（参入）だったからである。半蔵は徐々に後退を強いられいき、最後は座敷牢のなかでの発狂という結末を迎えるのだが、これがリアルポリティクス、世界システムそのものから見たときに、明治維新以後の日本がとった選択肢は、最初に指摘したとおり、こちらがリアルポリティクスだったとすれば、半蔵のこいねがう「新しい古」は、半蔵の日々の暮らしから蒸留された夢／ユートピアの彫琢でしかなかった。『夜明け前』というテクストは青山半蔵の全生涯を濃縮して出来上がった特異な理念／ユートピアの彫琢に賭けられていたということが出来る。が、それはその代償として、他のものを見ないことでもある。明治以降のリアルポリティクスが選択した近代国民国家としてのナシヨナリズム、そのダイナミックな動き、動態を見損なってしまった可能性もあると考える。それは後に指摘するが「木曾山林問題」の表象などにも露呈しているように思われる。

『夜明け前』の評価を見ると、まずオーソドックスなものとして亀井勝一郎の評価の枠組みを引き継いで、三好行雄の『夜明け前』の「近代」がある。即ち「藤村の発見は要するに、明治維新によって近世と近代を区分する通常の史観をしりぞけ、本居宣長の死前後にはじまる日本の十九世紀を、ひとつの連続した時間として認識するところにあった。東西両異質文明が対立と葛藤をくりかえした近

代化の過程として、それを再検討すべきだとするもので、その間のあわただしい流動をつらぬいた民族の伝統、いわば日本人の倫理的骨格についての確実な予感もすでに育ちはじめていた。

三好行雄は『夜明け前』の中に「民族の伝統」「日本人の倫理的骨格」(「エートス」ということを読み込もうとしている。つまり江戸から明治へ、西欧文明の外からのインパクトを超えて継続した内発性を問うことが、藤村のモチーフだった。これを突き詰めて言う)と民族の「内発性」ということである。三好は『夜明け前』の中に連続する、底の方に沈んでいる(内発的なナショナルリズム) (田口)、民族、そういったものを読み込んでいく。おそらく水本氏の立ち位置、あるいは理解の枠組みとは、そんなに遠くにはないだろう。

さらに『夜明け前』というテキストは歴史研究者からは評判が悪い。史実からみておかしいということが指摘されている。有名なのは服部之總の「青山半蔵——明治絶対主義の下部構造——」で、半蔵は平田派に位置しているということになっているが、平田学派の人物というのは「全国の豪農——名主や庄屋をつとめる農村の門閥」あるいは「それと縁組をする地方の豪商」で、その中に「青山家も」位置する。「その豪農は自由民権以前はすべて農民一揆にたいしては対立している」、つまり敵対関係にあった。「だから『夜明け前』で『旦那、誰もお前さまに、ほんとうのこと云うものがあらずか』といわれて半蔵が淋しくなるくだりがある」が、そういう平田派としての半蔵ということは、この小説の中に描かれていることくらいとどうも半蔵の観測はおかしい。「あれほど父を通して明治維新を願みながら、一番肝心なところで、明治維新を掴みとることがで

きない。それは藤村が、その生涯を通じて(ついに)政治的なものに開眼することがなかったことと関連しています」という。服部に言わせれば藤村はやはり政治的なもののシステムというかそのダイナミクスといったものを、ついに理解しえなかったのではないか。

次に、北條浩(島崎藤村「夜明け前」リアリティの虚構と真実)は、(青山半蔵)を研究する歴史学者であるが、「木曾山林事件」について氏は独自に地方資料を検証しながら、どうも『夜明け前』の「山林事件」に関する記述は変だと指摘している。つまり、「青山半蔵的理想と現実が一致することは、あの明治維新の置かれている、国内的、国際的環境からみてありえない。とくに、国内情勢の社会的・経済的変動から理想の実現は不可能であったという矛盾から体制をみていない」更に半蔵は何度か山林問題に関してコミットしていくのだが、青山半蔵は、山に頼って生きるしかない農民たちの立場に立って、それでは生活ができないということ、(嘆願書)を出すという動きになっている。ところが中央政府から送り込まれた官吏、悪代官みたいな記述がされているが、「本山盛徳」は実在の人物であるが、彼の横暴があつて嘆願書が受け入れられないどころか、半蔵自身の戸長としての資格が剥奪されていく、つまり「夜明け前」では、半蔵は少しでも理想を実現しようとしてそれにコミットするが、明治新政府の悪政によつて叩き潰されていくという構造で書かれているが、北條氏によれば、どうも実際の山林事件はそんな風ではなかったということを、膨大な資料で反証している。つまり明治新政府がやろうとした政策は、ものすごく複雑な法律や経済の問題がからんだ、非常に緻密なシステムに出来上がっているものを、何か悪い官僚がいて、青山半蔵がせっかやくやろうとした正義、

正しい行動が潰されてしまったという、非常に単純な、勸善懲悪的な構造になってしまっていることに北條氏は疑問を投げかけている。

たとえば水本氏は「自然」（「春を待ちつゝ」の冒頭に位置）について、ロダンに触れ、若いときは「自然を匡正する」ことを考えていたけれど、自然というものにコミットすればするほど益々「私達の眼が一度自然の無尽蔵なことに開かれ、さうして自然をその真理の中に再現しようとする他に努め求めるところがないならば、私達は私達の天賦の枯渇を畏れることはありません」という。水本氏は「これはそのまま『夜明け前』のモチーフでもあったからである」と指摘している。つまり「自然」ということをロダンの「自然」に重ね、歴史とか民族とかいうことを入れて考えれば、『夜明け前』になつていくのだ。若い頃は歴史とか民族とか、そういつたものよりも寧ろ自分のアイディア、理想というものを優先させようとしたけれど、深く静かに自分の内部に沈潜していったときに、実は自分の中に歴史とか民族、伝統とかいうものに繋がるものがあつて、そここそ無尽蔵なものが描かれている、真理があるという風なことを発見していったということで、きつと水本氏の中には『夜明け前』が藤村の「深く静かに沈潜して、内発的にたどり着いた民族、ナショナルリズムというものにつながると、間違ひなくそう考えていただろう。

ところが、先ほど歴史家たちが批判をしているところのポイントはいち、半蔵が考えている平田派の「新しい古」とは、「古代に帰ることは即ち自然（おのずから）に帰ることであり、自然に帰ることはすなわち新しき古を発見することである」というベクトルを持っているのだが、それが明治の新政府のなかで潰されていく、という

枠組み自体がいがわしい。

これを理想と現実ということで説明すると、半蔵が理想を追つても構わないのだが、中原氏のいつた「時計」の問題にしても、ありとあらゆるシステムが私たちの日々の暮らしのなかに、システムとして入ってくるし、それは単純なものではない。法律から経済から全部から入っていて、がんじがらめになっている。ところがそのシステムにたいし我々がどう関わるかというところ、そうした複雑なものの中で我々は、ぎりぎりつじつまを合わせながら、生きて行つていたのであつて、通常は暴発したりしない。半蔵のように、座敷牢に閉じこめられたりはしない。半蔵が発狂する理由はよくわからないが、「自分には敵がいる」「自分を迫害しようとしている」というような仮装敵のようなものを作り上げて、自らを窮地にどんどん押し込めてゆくというシステムの「向こう側」に、何かを求めてはいけぬのではないか。このシステムの中にぎりぎり、厳しい後退戦を強いられながらも、そこで何かつじつまを合わせていつて、ナショナルリズムの逃げ道にはいけない、これを水本氏に対するオルタナティブというところで出してみたい。

こうしたパネラーによる発題および捕捉説明の後、フロアからの質疑・応答に遷つていつた。

まず添田建治郎氏から次のような質問があつた。

まず服部之總が藤村の明治維新の見方の弱さというものを批判しているが、それを批判してもはじまらない。王政復古の欺瞞というのが藤村の頭の中にあつて、なぜこれを昭和の時代に採りあげたの

かというところ、『夜明け前』執筆当時つまり昭和の初め頃に、明治維新のありようが問題の出発点にあると、見えていたのではない。それはおおよそのところでは当たっているのだし、そんなに服部氏の批判にたじろぐ必要はないのではない。同様に江戸時代の捉え方も、服部之總の捉え方が、本当に正しいかどうか。

次に藤村が父を通して捉えた江戸時代も、彼の捉え方の中で江戸時代と明治とを繋いで、そこに何か疑問点、理想が破れた父の姿を描きたかったのではない。それが、昭和の時代も明治維新を引きずっている、というところが藤村の頭にあつたために、これを書きたかったのではないかという読みが取り入れられるものなのか。

次に、平田派一門の理想というのが一方にあつて、それと対峙する敵とは、つまり藤村にとつての敵は何だったのかというとき、確かに「黒船」というのか、「共產主義」という幽霊」が、大正・昭和のあたり、吹き荒れていたのだと思う。それが藤村の主たる、捕捉しなければいけなかった日本の邪魔者だったのかどうか、捉え方が間違っていないかとは思ふが、野坂氏の紹介されたマイケル氏の起草がそんな大きなものだったのか、やはり明治維新で実現されなかったものが「幽霊」として出ているのではない。

これらをどうして繋げていくかというところ、「この古めかしく疲れ果てた街道にも生気のそそぎ入れられる日の来ることを想像した」、「どうかして新政府を護り立て、後進のためにここまで道をあけてくれた本居宣長らの足跡をその明日にもたどりたいたい願った」、という記述と、「古代への回帰」つまり古の姿に新しいものを見いだそうとする姿勢が度々出てくるのだが、やって来た明治維新がどうだったかというところ、第二部下に頻出するが、半蔵がいろんなものに

失望する、明治維新のありようだったのではない。それが父の無念であり、それを何とかしたいというのが藤村だったのではない。それが『夜明け前』執筆の動機だったのではないかと素朴に考えてみたい。

鈴木孝夫氏が「人にはどれだけの物が必要か」で、漢語が日本に入ってきたときに、日本人はそれを金科玉条のように崇めて取り込んでしまったという歴史がある。漢文の文化というものであるが、次なる取り込み方というのが、今度は明治維新のときに西洋文明をもろごと取り込んでしまつてということを繰り返している。そして戦後はアメリカだと言われている。その描き方というのは、ある程度当たっているのではない。半蔵の見方と明治維新の課題とが重なってくるのだが、鈴木孝夫のこの指摘に何かヒントがあるのでないか。

この指摘に対し田口氏は次のように回答した。

歴史学者たちから、藤村は史実を間違えているという指摘が多いのだが、その中でも成田龍一氏は歴史学者でも服部らの立場を否定しながらも、『夜明け前』の中に見える歴史の表象の仕方に苦言を呈している。やはり、説得力とか強度とかの問題ということで見ても納得できないというのである。成田氏も本居宣長と平田篤胤とが同列に並ぶこと自体の矛盾に対して、どうしても作品の強度を弱めてしまう指摘している。添田氏の読みについては、ほとんど同感である。やはり半蔵は明治維新というものに期待していた、それは「新しい古」という、様々な漢語とかいうものに侵されない、純粹なる何か、日本的なものがあつて、それが実現するかと期待したに

もかかわらず、実際は期待を裏切られるような様々な出来事が現れ、やがて失調を来してくるという読みは、多分『夜明け前』という小説を読む者のスタンダードだと言っている。たとえば小林秀雄は『夜明け前』を耽読して、短い言葉ではあるが激賞している。イデオロギーとかいうことは問題ではなく、「僕は寧ろ気質を見ると言ひたい」。「作者が長い文学的生涯の果てに自分のうちに発見した日本人といふ絶対的な氣質がこの小説を生かしてゐるのである」という。「日本人の血」という言葉も見える。こういう評価を誘発する要素が、『夜明け前』には確かにある。ところがこういう小林の言説は、大変危険だ。何故なら、小林はこの時点で、イデオロギーとか思想とかいうものはもう信用しない。自分の身体感覚に、これだけは確かだと思われる美、たとえば私の肉体を直撃する確かな実在としての美とか伝統とかいうものしか信用しない。小林は戦時下になると、実在の政治システムとか力学といったものなどは一切信用しない。私の目が、認識自体が実在として感じ取れる、実在としての美のみに彼は黙って沈潜して行く。そういう感じ方で彼はあの戦時体制をしつかり支えた。なぜ小林秀雄や日本浪漫派の保田與重郎が、実は政治的な発言は殆どしていないにも拘わらず、なぜ彼らが戦争イデオログとして、あんなに強固な時間を保ったのか。戦争とか過酷な政治に耐えられるものは、何か、美しいものとか、実在しない観念としての日本人の伝統とか、血統とか、そういったものを信じて矛盾の中を生きた人たちがいる。そういう力があったと思うのだが、そういうところにナシヨナリズムを持って行くことに対して、そういう現実のシステムの向こう側にそういう何かを見てはいけない、そういう美学はいけないと指摘しているのだ。

次に野坂氏は以下のように回答された。

マイケル・ポータッシュ氏の意見を紹介している形になるのだが、アメリカの方で彼は本を出されて、そのタイトルが『The Dawn That Never Comes』、夜明けは決して来ないというアイロニーに満ちたタイトルをつけておられる。先ほどのご質問に関してのが、まず明治維新の半蔵にとつての敵というのは、恐らく中世封建制だと思う。それは身分社会とか、明治維新で半蔵が消滅すると期待していたものが、実はしつこく残っているというところに「幽霊」というものが感じられたと思うのだが、転向者の中にも吉本隆明氏が見ているのはその転向というのが共產主義のインターナシヨナリズムの中に実は日本の家父長制とか、土着的な封建制というものが残っているということを吉本氏も指摘しているという意味で、非常に似ているのではないか。

それから『夜明け前』の解釈に関してだが、もしかしたら藤村というのとは他の色んな人たちとは違って内発的に『夜明け前』に辿り着いたという可能性は決して否定できない。しかし問題としてはこの一九三〇年代に明治維新を書いた小説というのが沢山出ている、たとえば林房雄の「青年」などもある。そういったものにどうしても重なって読まれてしまうところがあって、当時の批評家たちの解釈もそこに偏ってしまう。それを藤村が意識したのかということが気になっている。

次に金戸から以下の指摘があった。

たとえば「黒船」の「幽霊」を「トラウマ」と言い換えると、違っ

た文脈で読めるのではないか。田口氏が水本先生のを「内発的なナシヨナリズムの可能性をさぐっていた」ふしがあるというが、もう少し三好行雄との、微妙であるかもしれないけれども差異化というものを常に水本氏は見ておられたし、そういう中でたとえばかつて勉強会の中で、「近代の超克」あるいは「日本の橋」なんかを見て行く中で、当時の知識人たちがプロレタリア文学運動に挫折して、デスパレートな感情からナシヨナリズムに入っていく、そのスイッチが、野坂氏も指摘しているように、すつと入っていく、それがナシヨナリズムになっていくのは、非常に危険だと、水本氏が指摘し続けてきた問題であろう。そうした中で、ナシヨナリズムと同時に藤村が模索しようとしていたものが、言ってみればインターナシヨナリズムというか、そういう部分も実はあるのではないだろうか。

水本氏の資料の中でも、たとえば人類愛とか、たとえばフランスに行つてとかいうことを書いている。それからベルグソンの問題は、水本氏の口から、たとえば、血縁とか兄弟愛とか、近隣とか、そういったところまではすぐ行くのだがそこから人類愛という所まで行くにはどうしてもワンステップおかないと行けないと言われていた。その部分が、よく水本氏が引用されていた、川端康成「純粹の声」にある宮城道雄とルネ・シュメーとのコラボ、あるいは西と東の融合とか、そういう視点を藤村は見ていたのではないか。

二部上冒頭に長々とハリスの手紙が引用される、その部分で「国を開くか開かないかの早い頃に来てこのハリスの教えておいたことは、先入主となって、日本人の胸の底に潜むようになったのである。あだかも、心の柔く感じ易い年頃に受け入れた感化の人の一

生に深い影響を及ぼすように」、これが、第一部冒頭の「黒船」の記述との対比の中で書かれている。たとえば「近代とは何か」とか、そういう問題はおそらく昭和一〇年代以降に「近代の超克」とか、高山岩男が出てくる遙か前に、藤村が、近代とは何であったかということ、自分の祖父の代まで遡って探ってみようとしている。その部分を、「木曾路」という裏街道の中で交通の、江戸と京都、あるいは東と西との中間に位置する空間の中で暴き出そうとしている、そういう物語として、みんなは読み取ろうとするのではないか。その中で近代化ということが、たとえばどこで間違えたのだらうと、ボタンのつけ違いがどこにあったのだらうと、一つ一つボタンを外しながら点検していくようなところがあるように読める。そうした中でこの「黒船」というのが、嘉永六年のこの出来事から物語が展開していくところに、「黒船」というものがある意味日本のトラウマとなっているのではないかとこの読み方はできないか。

これに対し田口氏は以下のように回答した。

インターナシヨナリズムというのは大変美しい、安心できる理論ではある。ベルグソンは危険だという自分の指摘は暴言かもしれないが、これを水本氏が「文明論資料」で、かなり長く引用されていること自体、すごく気にされていたことが窺えるのだ。家族愛・祖国愛と人類愛、この二者は排斥というものを含んでしまっている。

当然全人類を愛するといった人類愛を包含するといったことを志向するといふベクトルがあると。この理念自体は美しいと思うし、批判もしないが、アプローチの仕方が、ベルグソンがいうような、人間の精神の問題ではないのではないか。水本氏が青木保を引用して

いるが、氏が傍線を引かなかった部分に次のような指摘がある。

「強いナショナリズムが生まれる国や社会にはさまざまな不満や怨嗟があり、内外の脅威が感じられ、多かれ少なかれ、不幸な状態（に）置かれているからである」。ナショナリズムに誘引されていくということの背景は、こういう国や社会に色んな不備があるという問題である。ナショナリズムは、いわば、社会システムの問題なのだ。個人の内面で家族愛とか祖国愛とかを超えて人類愛とかになっていくような理念的なものというよりは、その社会のシステムの孕む色んな貧困とか格差とか、そういう問題がナショナリズムに流れ込む要素が強くある。言うなら、今引用した青木氏の部分に明治新政府の問題があるのであれば、そこを考えていかないと、青山半蔵の内面のドラマではなくて、社会システムの問題としてこれを論じていかないと小林秀雄流の「血」の問題とかいうところで絶賛する回路を超えられないのではないか。

更に野坂氏は次のように説明された。

藤村が、田口氏のいう「向こう側」に、行くことができると思っているのかそうでないのか、そこが一種のアイロニーとなつていくというか、日本浪漫派のいう「イロニー」につながるのだが、その問題とベルグソンが言っている問題、あるいは柄谷行人のいう「ヒューモア」というものがどれくらい藤村の中にあるのかということが気になっていた。実は保田與重郎が『夜明け前』について、殆ど何も言っていないというのが非常に気になって、そういう問題と絡めて掘り下げたかったのだが、ちょうど中間で、金戸と田口氏のどちらにも行けない立場である。

次に平野芳信氏から次のような質問が上がった。

自分自身の関心として、『破戒』と似ていると思った。つまり『夜明け前』は『破戒』にあつた社会小説としての可能性を更に探ろうとしたものではないか。また『夜明け前』の、女性の描かれ方について質問したい。つまりお民の描き方などを、どう読んだらいいのだろうか。それは恐らく「向こう側」の問題にも絡むのかだろうが、これを肯定的に読んでいいのか、あるいは描き方の限界として読んだらいいのか、ということがよく分からない。

以下は田口氏の回答である。

お答えにはならないのだが、『夜明け前』で気になる女性がいる。半蔵が江戸に行くとき必ず宿泊する宿、「十一屋」の主人多吉の妻「お隅」である。江戸っ子で、半蔵にもずばつとものを言うような女性である。生活に密着していて、観念にさまよい出ない、おおよそ半蔵と対極にあるような女性としてでてきている。自分が指摘した「日々の暮らしに培養された主体的なナショナリズム」という問題であるが、本当に地に足を着けて、その中で培養された人生観やものの見方を展開しているのは、実は半蔵ではない。本当は藤村が描く以上に、実際の父は農民の生活のことを知っていたのだろう。藤村自身は小さいときから東京に出て、都会の中で暮らしている。藤村の田舎での生活のこまごまとしたことは、彼は資料を読んで把握しただろうが、やはりリテラルなものにすぎない。それは藤村の国学に対する理解も同様で、やはり、日々の暮らしに、地に足を着けた上で出てくるものではない。この小説の中で逆にそういうもの

を浮かび上がらせるのは女性たちの表象としてではないだろうか。半蔵がそういうものではないという、ネガティブなものとして書かれている可能性を思っていた。

更に平野氏の「マルクス主義によらない社会性の可能性は」との質問に対し、野坂氏は次のように回答された。

女性の問題は全然考えていなかったのだが、たとえばお糸が自殺したことに関してもなぜなのか、座談会などで問題にしているくらいだし、一方で女性がまったく書けていないという指摘もある。藤村がというよりも当時の人がそれをどうとらえるかということ問題にしたいのだが、やはり女性が描けていないというものに対して小林秀雄はお糸の自殺を「納得できるものである」という評価をするし、島崎藤村が一種、どのようにも読めるというふうに書いているというような、アイロニーがあるのか程度の読みである。

以下は中原氏の回答である。

自分も女性という視点でまとめて考えていたわけではなかったが、『破戒』の焼き直しということ関係して、やはり自己引用的な部分はあるだろう。お糸というのは『若菜集』「六人の処女」に出てくる女性、恋愛のために家を出る女性の名前が「おくめ」であるし、その同じ名前の女性が『夜明け前』では半蔵にシンパシーを持って自殺未遂をするという、そういったところは明らかに自己引用的だとわかる。水本氏が「文明論集」の終わりに長々と「融和問題と文芸」の『破戒』を引用されている。傍線部分は最後のところだけだったのだが、『夜明け前』の大きなモチーフとなっていると思われる。

『破戒』という小説の構造をある程度とっている。ある意味では父から独立する子の物語だし、あるいは「テキサス」行きという曖昧な結末で終わってしまったという、そういったものを改めて書き直したという部分はあるだろう。

『破戒』との類似性の問題で、添田氏は次のような質問をされた。『破戒』では蓮太郎の「戦死」というのがあったが、郷土の先輩の「戦死」により、丑松は自分の「戦死」も軽く見えたのではないか。まさに戦争における戦友の戦死があった時に、自分の「生」が軽く見えて、「告白」に到ったのではないか。そういった意味で『夜明け前』において、彼が狂う前に、平田一派の理想が実現して行かない中で、自分一人は遺っているが、友人の死の中で、やはり何かしなければならぬという、そういう図式が成り立たないだろうか。

これに対し中原氏は、『夜明け前』の中に蓮太郎的存在はないようにうだと回答した。更に添田氏は、師である鉄胤との心の関係が見えていないような気がするのですが、ないのかとは思いますが、友人たちが先に死んでゆく、あるいは京都や東京で活躍していた友人たちが、明治維新に埋没してしまうのが、悔しかったりしたのではないかと指摘された。これに対し中原氏は、深くは考えていなかったが、それは確かにあるだろうと回答された。

更に田口氏は次のように指摘された。

半蔵は理想とする部分と現実にある自分の持ち場、父のやっつい

る「本陣」から逃れられないから、友人みたいに跳べない。ずっと縛り付けられて、維新を迎え、ぐずぐずしている内にどうとう自分の立場を剥奪されて、最後は単なる隠居になってしまう。そういう所から見れば、理想の方に跳べない、現実には縛り付けられている。しかしその中でどんな理想の部分が圧縮されていったり、いびつなものに形を変えていったりして、扇を投げたりとかいう不自然な行動になっていく。最後座敷牢の中で汚物を投げたりする部分にながって行くのだが、こう見ていくと確かに半蔵における理想と現実という問題は、決してどちらかが切り離されてあるわけではなく、両者が矛盾しながら絡み合って、身を滅ぼしていったという構造になつてゐる。小林秀雄はそこになにかを見たのかもしれない。

中原氏は半蔵の結末の問題にアイロニカルに浮かび上がるのが、「執拗低音」と指摘されるが、中原氏の説明の原理は小林秀雄の説明の原理と同じ放物線を描いているように見える。半蔵の一生をアイロニカルに描いて、なお到達できない「夜明け」がここに表されているというのは、小説としてはすつきりした読み方であるが、それはロマンティッシュ・イロニーにも近い。それが、実現不可能であるという形で一度断念されたときに思い描かれる浪漫主義というものゝが戦時下において当時の若者たちの魂をぎゅつとつかんでいった訳であるが、その放物線と似ているのだ。だからそれはよくない、オルタナティヴを出そうという立場である。

キーワードは「日々の暮らし」と「地に足を着けて」である。我々は多分半蔵のようなスタイルではない方向でいたい。ナシヨナリズムもそういう方向で描くのではなく、サステイナティヴ、持続可能なナシヨナリズムというものを考えている。

最後に中原氏が次のように締めくくられた。

個人的にはまだまだ論じ切れないと感じるのだが、「夜明け前」は、藤村をライフワークとして取り組んでこられた水本氏が、最後の最後までとっておかれたの巨大な作品である。氏は慎重に、外堀をすこしづつ埋めながら追っていかうとされた作品だった。それが完成されなかつたのは本当に残念だと思ふのだが、それに少しでもコミットするのもいいし、向き合うというか、反発し合うのもいいと思ふ。このシンポジウムを学会の一部に取り込んでいただき感謝している。水本氏を起点として始まった「談話会」の動きはこれで終わりとなるが、これが何かまた新たな展開となることを期待してこの談話会を閉じたい。

(かねと・きよたか)